

『歴史に登場する鮎・年魚・細鱗魚・溪鱧・香魚・アユ』

15期 土屋 寛

(京都大学博士・工学 1992年)

小学生の頃には東京深川の埋め立て地周辺はハゼ釣りのメッカであった。見ようみまねでハゼ釣りに興じて以来、波止場での小物釣り・船上からの沖釣り・波打ちつける磯釣り・氷点下 10 数度の氷上ワカサギ釣り等、いろいろな釣りに手を染めてきた。アユの友釣りの手ほどきを受けてからすでに 35 年経つが、未だに毎年 6 月前後の解禁日が近づくと気持ちが昂り、落ち着かない。

長さ 9 m を超える竿とほぼ同じ長さの糸の先に、オトリアユを結び付けその尻尾に掛け針を括り付ける。これを流れに放して清流の苔を食む野アユの傍を泳がせる。自分より弱いアユに体当たりして好みの苔の付いた水中の石を独り占めしていた野アユは、近くを通るオトリアユを後ろから追いかけてオトリの下に潜り込んで腹をめがけて体当たりする。野アユはすぐに反転して元の居場所に戻ろうとするが、この時にオトリアユの尾に付けられた掛け針が背中に刺ささって、竿には 2 匹のアユが付いている状態になる。2 匹とも手網に捕って、掛かった野アユを次のオトリとして糸先に付け、先のオトリは川に浮かべたフネと呼ぶ活かし魚籠に保存する。

真夏の太陽が容赦なく照り付け、夕方の雷におびえ、夕立の冷気にも耐えて、日の落ちた山間の光と川の水の透明度がほぼ等しくなってやっとアユ釣りの一日が終わる。

この釣りに凝って人生路を狂わせるほど夢中になった話も聞かれるほど奥の深い釣りなのである。本の活字を追えば「鮎」という字に” ナニ一っ”と目を見張ることも再々である。いっそのこと集めてみたらと思いついたのはこの道に入って 5 年もたたない頃である。ここに紹介させていただきたい。

□アユの語源

古くは「安由」と書かれていたらしい。古語に『あゆる』という”落ちる”を意味する言葉があったという。秋になって河口近くで産卵のため、流れに乗って下流へと落ちていくことからつけられたのであろうか。

「鮎」という字は中国語では”ナマズ”を意味するそうだ。「年魚」と書かれるのは、春に稚魚として川を遡上し秋に河口まで下って、産卵後にはその一生を終えることに因んでのことか。「細鱗魚」と書いてアユと読ませるのはこじ

つけの感なきにしもあらずだが、確かにアユの鱗はかなりこまかい。「溪鱈」とは峪川のイワシという意味である。昔は川の色が変わるくらいのアユの群れが見られたに違いない。「香魚」と書かれるアユが最もふさわしく感ぜられる。オトリに誘われて掛かった野アユは手網の中でまさに切ったばかりのスイカの香りを放つ。

□古事記に現れるアユ

古事記中つ巻 仲哀天皇の項 《神功皇后の新羅征討》の部分に年魚が登場している。息長帯日賣命と呼ばれた神功皇后は神懸かりを受け半島に制圧軍を進める。兵たちの士気高揚のため、この戦の首尾を”占う”目的で大芝居を打つ。以下原文の通りの記述。

『筑紫の末羅縣の玉島の里に至りその川に御食したまいしとき、四月の月上旬に當き。ここにその河中の磯に座して、御裳の糸を抜き取り、飯粒を餌にして、その河の年魚を釣りたまいき。故、四月上旬の時、女人、裳の糸を抜き、粒を餌にして、年魚を釣ること、今に至るまで絶えず』

事の正否を占った魚であることから「鮎」という字が当てられたといわれる。

□万葉集のアユ

万葉集 卷 第五に山上憶良の作といわれる『松浦川に遊ぶ序』という段がある。土着のうら若き女性たちが、粹な上流階級の中年に見られて、はにかみながらもアユを釣るという構図で、古事記の記事を裏付ける内容となっている。アユを織り込んだ七首の歌が記載されている。そのうちの一首、憶良が見とれてしまった理由が解るような情景が思い浮かぶ。

松浦川 河の瀬早み 紅の 裳の裾濡れて 年魚か釣るらむ

□常陸風土記のアユ

『久慈郡』の項 中段に次の記載がある。

『郡の東□里に、山田の里あり。多く墾田となれり。因りて以ちて名づく。有るところの清き河は、源、北の山に発り、近く郡家の南を経て、久慈の河に会う。多く年魚を捕る。大きき腕の如し』

現代までも久慈川はアユの名川として知られる。冬になると全体が凍ってしまうので有名な大子の滝の近辺の国道沿いに、秋口からアユの串焼きの店が立ち並ぶ。腕のごときアユにお目に掛かって見たいものであるが、現在わが国で報告されている最大のアユは42cmと云われる。

□謡曲『国栖（くず）』のアユ

世阿彌元清による謡曲『国栖』は壬申の乱の一方の旗頭 大海人皇子が、病床の兄 天智天皇と決別して吉野への逃避行中に会った人の心との触れ合いを描いている。玉座を心ならずも甥の大友皇子に譲り、それでも身に迫る危険を感じて出家する旨を天智天皇に宣したうえでの逃避行であった。心中の無念ははかり知れないものが有る。追っ手を気にしながらも、疲れた身を国栖川の辺の庵にやすませる。そこで老夫婦が馳走してくれたアユにいたく感激し、神懸かりを受け壬申の乱へのポテンシャルを高めたという物語である。

□徒然草のアユ

徒然草 第 182 段に鮎が登場する。

『四条大納言隆親卿、からざけというものを供御に参らせられたりけるを、「かくあやしき物、参るようあらじ」と人の申しけるを聞きて、大納言、「鮎という魚参らぬことにてあらむこそあれ、鮎のしらぼし、なでふことかあらむ。鮎のしらぼしは参らぬかは」ともうされけり』

□秀吉がアユを食べた証拠

南方録という本がある。千利休と生活を共にしてその行動・物の考え方を学び、茶の展開と哲学・美学を体系づけた書といわれる。その中に記された茶事の会記に”小あゆ”が見られる。それによると3月9日に秀吉を客とした一客一亭の茶事が行われたようだ。熱くあたためられた焼き物皿の上に川を遡上しはじめたばかりの小鮎の塩焼きが三つばかり、まるで生きているかのごとく盛り付けてあったに違いない。幼少の頃、尾張中村の川で夏にはアユを追い回していたであろう秀吉は「ホーッ」といって目を細め、満足げにほおばったにちがいない。利休はそんな秀吉に酒を勧め乍ら、釜の湯の沸き具合を測っていたのだろうか。

□「八紘一字」精神とアユ

大東亜戦争の頃、文化圏と政治圏との合致が議論され、その折にアユの住むところ日本の勢力圏たるべしと主張した人たちがいたという。そして戦争に負けたのはアユ圏の外にまで兵を出したからだという。神功皇后以来アユは戦争に関係づけられる因縁があるようだ。

因みにアユの分布は朝鮮半島から中国各地、台湾北部となっており、石の少ない大陸の川には見られない。

□アユの友釣の起源と古文書

伊豆狩野川に注ぐ瀧沢川に旭日滝という落差 100mほどの滝があり、竜源寺という寺の跡がある。修善寺から天城方面に 1 kmほど入った地点である。そこに住んでいた普化宗虚無僧 法山志定という尺八の名手が、狩野川のほとりで尺八を吹きながらアユの動きや習性を観察し、友釣を考案したといわれる。

1780 年（安政 5 年）志定没してから約 50 年後の 1832 年（天保 3 年）の古文書に『友釣』という言葉が見られる。このあたり昔から友釣の名人を多く輩出していることを考え合わせると頷ける話である。

残念ながら昭和 35 年の狩野川台風による山津波は古文書を始め全てを埋没させてしまった。
(この項 釣り雑誌より抜粋)

趣味の世界は何事にも“病膏肓”（ヤマイ コウコウ）“オタク世界”になり易い

が、当人は“名人”を気取っているから始末が悪いと家人は感じている様子だ。

残念なのは卵からかえったアユの稚魚が海で成長して、再び元の川へ還る天然

アユの遡上が激減していることだ。養殖アユの放流という自然の成り行きとは

異なる方策で河川のアユを維持している。鮎の友釣という文化がどこまで継続

されるかという心配は決して杞憂ではないと思われる。